



The publication of the Japan Spina Bifida and Hydrocephalus Research Foundation "B & C" Vol. 30 No.4 February 2024

## 人が危機に備える必要性を納得するのは、 たいてい危機にのみ込まれてしまった後である

「百年法」(山田宗樹)より

澤田 勝寛

財団 理事長  
医療法人慈恵会新須磨病院 理事長

### 阪神淡路大震災発生時の様子

表題の言葉は29年前の1995年1月17日阪神淡路大震災が発生したときの私のことであると自戒しています。

神戸に地震は起こらない、電気もガスも水もあって当たり前前、食事は1日3回食べるのが普通、お風呂は毎日、電話はいつでもかけることができる、夜は温かい布団にくるまって寝る、などといった当たり前前の日常がいと簡単に奪われたのが阪神淡路大震災でした。鉄筋建てのビルや家屋が腰を折るように倒壊し、阪神高速道路は崩れ、道路は寸断され、線路はうねり、電車は脱線し、あちこちで火災が発生して、多くの人命(6,434人)が失われました。

私が理事長(当時は院長)を務める新須磨病院に入院中の患者さんに負傷者がいなかったことに安堵しました。建物は倒れずに残ったものの、多くの医療機械が破損し、壁はひび割れ、天井には穴があき、地下は液状化現象で足の

踏み場がないような状況でした。ガンマナイフ(重さ約20トンは太いビスで固定してあったため動かず破損を免れました。これが破損し線源であるパチンコ玉のようなコバルト60が一個でもこぼれ落ちていたら病院を閉鎖する必要があったと、あとで当時の科学技術庁の担当者から聞いたときはぞっとしました。

病院周囲では多くの家屋が倒壊し、たくさんの負傷者が病院に運び込まれてきました。血を流しながら歩いてくる人、骨折の痛みをこらえながら運ばれてくるお年寄り、戸板に乗せて心臓マッサージをしながら運び込まれる方もいました。生き埋めになった方の口の中に泥が詰まっていたり、気管内挿管ができないこともありました。電気もガスも水もなく、医療機器は壊れ、限られた医療スタッフが、薄明りの中でできることを必死で行いました。泣き声・叫び声

が満ち溢れ、死亡が確認された母親の心臓マッサージをずっと続ける息子さんもいました。

まさしく阿鼻叫喚の世界。結局地震当日、病院には250人の負傷者が運び込まれ、うち22人が亡くなられました。

関西電力と交渉の末、電気は当日夕方には復旧できましたが、水道やガスの復旧には時間がかかりました。特に生活用水と透析のための水の確保には大変な苦勞をしました。自衛隊の給水車が何トンもの水を運んで来てくれたときは思わず万歳をしました。

家では懐中電灯がたよりで、暖房のない中で布団にくるまりながら、冷たい弁当やパンを食べていました。それでも空腹を満たすものなら何でもありがたかったです。父は水の代わりにビールで口をすすいでいました。

風呂は病院グループの老人ホームの大浴場が利用できるようになって、地震から1週間後に職員達とマイクロバスに乗って大浴場へいきました。温かい浴槽に浸かったときはあまりの心地よさに腰が抜けそうになったのを覚えています。

### 能登半島地震

元旦に起こった能登半島地震から1月が経過して、その詳細がようやく明らかになってきています。大地震と津波による二重の被害、半島特有の一本道というアクセスの悪さ、そして冬の寒さの厳しい北陸での災害のため、復旧に時間がかかり、いまだに過酷な避難生活が強いられています。

国の対応が遅いと野党がこそって非難していますが、今非難しているその野党こそが、阪神淡路大震災のときに、そして不幸にして東日本大震災のときにも政権を担っていたわけです。いずれもその対応のまずさはご存じの通り。阪神淡路大震災被災者として筆舌尽くしがたいものがあります。

阪神淡路大震災や東日本大震災の時と比べれば官邸も迅速に動き、自衛隊も早く現地入りしたと思います。また、阪神淡路大震災のときは、知事の要請がなければ自衛隊は被災地に入ることができなかった法律は、その後改定され、自衛隊独自の判断で被災地に入ることができるようになりました。

能登半島地震でスマホのアンテナ基地が壊れ、電源や電線が遮断されたため、通信が途絶えたところもあったようですが、以前に比べ通信手段は格段に改善されていると思います。阪神淡路大震災ときには携帯電話が少し普及し始めたくらいで、ほとんどが家庭の固定式電話でした。そのため、被災地では通信するすべがなく、安否確認もままならない状況が続きました。

行政の動きや自衛隊の動き、そしてスマホの普及が阪神淡路大震災から大きく改善されているなか、不思議に思うのは、阪神淡路大震災から29年経っても、いまだに避難所では被災者は床に毛布や段ボールを敷いた雑魚寝を強い

られ寒さに震えていることと、トイレがなく汚物処理に苦勞しその悪臭に苦しめられているということです。

避難所に想定される体育館や公民館に、段ボールベッドや簡易トイレを災害に備えて蓄えておくことがそれほど困難なこととは思えないのですが、、、。

### ボランティアと自衛隊

阪神淡路大震災がボランティア元年といわれ、ボランティアという言葉が流行りになりました。「ボランティアに来ましたので、食事と寝場所をお願いします」といって阪神淡路大震災のときに病院にやってきた若者がいました。こちらは食うや食わずの状況で必死に復旧に取り組んでいるなか、そのような心得で来てもらっても迷惑になるだけです。ボランティアは原則自給自足です。気持ちは分かりますが、被災地の手を煩わせないことが大切です。

今回の地震でも早々に国会議員が被災地を訪問し、カレーを食べた云々の是非がネットで物議を醸していましたが、どういう立場であれ、被災地にとって迷惑になる行為は慎まなければなりません。

その点自衛隊は完全な自給自足部隊です。もともとは戦争で国民を守るための組織です。訓練を繰り返したスキルと強靱な肉体を持ち装備も万全です。アクセスの悪い半島の先まで物資を届けるために、背囊に重い救援物資を詰め込み、亀裂が入り雪が深く積もった道を一步一步進み、急峻でぬかるんだ崖を登って孤立集落に支援物資を届けています。ネットで公開されている画像の、黙々と任務を果たす姿には本当に頭が下がります。

以上、29年前に私が経験した阪神淡路大震災の状況、能登半島地震との比較などについて思うことを書きました。

故寺田寅彦博士は「天災は忘れた頃にやってくる」という有名な言葉を残していますが、今は忘れる前に頻発しており、改めて危機管理の必要性を痛感しているところです。

表紙の写真

# 万里の長城

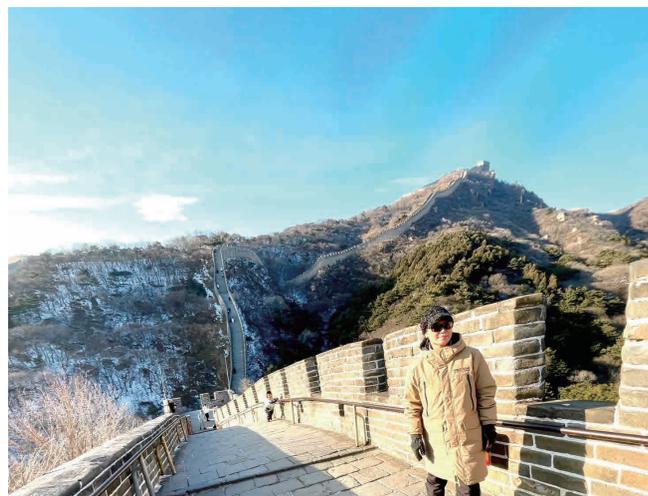
Kong, Jun  
孔 軍

アッヴィ合同会社 クリニカルスペシャリスト

中国の万里の長城は、もともと古代の外敵防御のために築かれた長大な城壁。春秋戦国時代における各諸侯国間防御工事が起源で、秦の始皇帝統一後、連結修繕して、今の万里の長城の雛形になりました。明朝時代に修築された明の長城が最も有名で、長さ約8852km。中国の河北、北京、内モンゴル、山西等15個の省、市にわたるそうです。

1987年に世界文化遺産に認定され、世界十大奇跡の一つとも言われました。地形に合わせてうねるように築かれたその長城は、まさに「龍の背中」です。防御壁として造られた壁の切れ込みが、龍の鱗のようにも見えます。急峻な山に造られているため、その最大斜度はなんと約60度前後。整備された道ではあるもののその角度はかなりキツイので、手すりをしっかりと握りながら手足併用して登っていくシーンがよく見えます。急斜度の階段は、他の場所とは視点が変わる絶景ポイントでもあります。“長城に至らずんば、好漢にあらず”、「万里の長城に至らなければ、立派な男にはなれない」といった意味の諺で、中国人の心中には、一生に一度は行くべき所として憧れる場所です。

北京で生まれ育った私は、\*「近水楼台」、独身時代、自分を励ます為に何回も長城に行ったことが有ります。子供が生まれた後も、子供たちが‘好漢’になれるように、まだ幼かった子供たちを連れて行きました。(子供たちはおそらく何も覚えていないでしょうね。)



孔 軍 先生

人生一瞬間、来日してから30余年が過ぎました。神戸大学脳外科名誉教授、故松本先生を始め、人生の恩師、恩人として沢山の方々にお世話になり、異国他郷で勉強、仕事、子育て、人生の大切な時期を過ごしました。阪神淡路大震災に罹災、コロナ感染を経験しながら、言葉の壁を超え、少しずつ今迄歩んできました。忘れられない、心から感謝の気持ちでいっぱいです。

今年、新年に久し振りに故郷に帰ることができました。初詣の代わりに、大きくなった子供たちが本当の‘好漢’になれるよう、そして、私たちもずっと感謝の心を抱き、恩人たちと励まし合い、前向きに自分らしく生きる為、10年以上ぶりに子供たちを連れて、-11℃の万里の長城を登ってきました。以前よりも登るのは苦勞で、大変だったのですが、新たな願い、挑戦が叶うように、とっても有意だったと思っております。

\*編者註：“近水楼台”  
「近水楼台先得月」水に近い楼台は先ず月を得る、有利な位置にいるという意味

## 事務局からの **おたより**

新年のお祝いをするや否や、能登を襲った大地震に唾然となりました。同じ1月に発生した阪神淡路大震災が思い出されました。地震発生から1か月、アクセスの問題、降雪、様々な悪条件に被災された方々の避難生活の過酷さは想像に難くありません。一日も早く復興が進みますように祈るばかりです。

新年最初の発行というので、澤田理事長にご挨拶方々、思いのたけを綴ってもらいました。そして、「表紙の写真」とその解説を孔先生からいただきました。是非ご一読ください。

### 孔 軍 先生 「万里の長城 “不到長城非好漢”」

「今回の写真はどこかしら？と思いながら読んでいきます」と仰ってくださる方もあって、表紙の写真を選ぶのに力が入ります。本号の表紙写真は中国「万里の長城」です。孔先生が撮られたものです。高いところでは海拔1,000mを超える山頂に9,000km近く連なる城壁。教科書で学んだ歴史が目の前に広がるようで感動します。「龍」の背に例えられる万里の長城を「辰」の年初の機関誌に掲載させていただくことができ、パワーを頂いたように思います。

孔先生は、北京天壇病院脳外科から神戸大学脳外科講座へ留学、松本悟先生(財団前会長)の元で学ばれ、大学院を卒業されました。先生が来日されて初めてお会いした日、「私たちは漢文の授業で『論語』を学びます。孔子と同じ苗字ですね」と、会話のとっかかりにと思って話題にしたことだったのですが、「ハイ…直系ではありませんが…76代目です」と。何と、先生は古代中国の思想家、孔子の末裔でいらっしゃるのです。私の目の前の、ファッション雑誌から抜け出してこられたようなこのお綺麗な先生が孔子の子孫…腰が抜けるほど驚いた日のことが昨日の日のように思い出されます。先生は中国(北京)語、英語のバイリンガルで、日本語もあつという間にマスターされまし

た。松本先生を「日本のお父さん」として慕われて、亡くなるまでご縁が続きました。

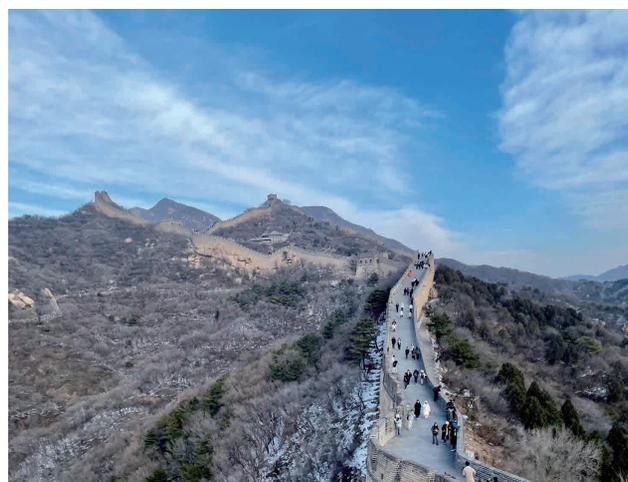
コロナの感染拡大の折、マスクがなくて困っている時、一番に尋ねてくださり、中国のご友人に頼んでくださるのマスクを送ってくださるよう手配して下さったこともあり、「異国他郷で人生の大切な時期を過ごしました」とありますが、母国より日本での生活が長くなりました。

### 研究助成

この度、3名の先生方に研究助成金を贈呈することになりました。石塚佑太先生(川崎医科大学・病態代謝学講座)、宮田潤先生(長崎大学大学院医歯薬学総合研究科、離島・へき地医療学講座)、小森裕美子先生(関西医科大学脳神経外科学講座)の先生方です。2月18日、ホテルオークラ神戸にて贈呈式を行います。その様子を後日機関誌にてご紹介させていただきたいと思っております。

本年もどうぞよろしくお願ひいたします。

九十九そのえ (1/31)



Brain and Spinal Cord "B & C" Vol. 30-4

発行日：2024年2月14日

発行者：長嶋 達也 編集者：九十九 そのえ

### Contents

- ① 人が危機に備える必要性を納得するのは、たいてい危機にのみ込まれてしまった後である … 澤田 勝寛
- ③ 表紙の写真 万里の長城 … 孔 軍
- ④ 事務局からのおたより

公益財団法人 日本二分背椎・水頭症研究振興財団

〒654-0047 神戸市須磨区磯馴町 4-1-6

Tel : 078-739-1993 Fax : 078-732-7350

E-mail : jsatoshi@xa2.so-net.ne.jp

<https://spinabifida-research.com>

表紙写真 万里の長城 孔 軍 撮